

古フランス語の平叙文における CVS語順の名詞主語と人称代名詞主語

— 13世紀前半の散文3作品を資料体として — *

Sur le nom sujet et le pronom personnel sujet exprimé d'ordre CVS
dans la phrase énonciative en ancien français

— A partir de trois documents en prose de la première moitié du XIII^e siècle —

今田良信

IMADA Yoshinobu

0. はじめに

古フランス語では、何らかの理由で主語が動詞の後に来て（倒置されて）、しかも人称代名詞である場合には、文法書によりその頻度表現は様々ながら、一般的にかなり高い度合いで「省略される」旨の記述がなされている。¹⁾しかし、実際にテキストに当たってみると、省略されていない事例がかなり多数散見される。

これまで筆者は、拙論(2005a), (2007), (2008)において、この問題の事実関係を方法論も含めて実証的に、かつオリジナルな方法で検証してきた。具体的には、各拙論ごとに13世紀前半の個別の散文作品から網羅的に収集した事例を資料体として、CVS語順の平叙文において「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2つの条件を満たしていながら省略されていない人称代名詞主語と「動詞の後」の名詞主語の出現比率などを対比し、文法書の記述と実際の分布状況との乖離を探るというものである。本稿では、上記3つの拙論の結果を併せ、13世紀前半における言語状況として一度全体をまとめてみたい。

1. 問題の所在

その前に、これまでも拙論の中でその都度述べてきたが、この問題の背景について説明をしておかなければならない。

前節冒頭でも述べたが、古フランス語では、主語が動詞の後に来る場合、その主語が人称代名詞であれば、かなり高い頻度で省略される旨の記述がなされている。

例えば、Raynaud de Lage(1975), p.149には、

「主語は動詞の後にあると仮定される場合、極めて頻繁に省略される。特に主語が人称代名詞である時には、主文においても、疑問文においてさえも、省略される。」(大高 訳)

と述べられている。また、Ménard(1976), pp.52-53では、

「文頭の直接または間接〔目的〕補語、状況補語、副詞は、《主語の倒置》を引き起こす。その主語が人称代名詞の時は省略される。」（拙訳）（〔 〕内筆者補足、以下同様）

としている。興味深いのは、Ménard(1988)〔1976年版の改訂増補版〕では、同じ箇所(pp. 52-53)の説明が、

「その主語が人称代名詞の時はしばしば (*souvent*)省略される。」（拙訳）（下線部筆者、以下同様）

と修正されている点である。この“*souvent*”1語の有無がもたらす意味内容の違いはかなり大きい。前者では100%省略されることになるのに対し、後者では省略される程度は100%よりもかなり下がることになる。しかも、受け手により、その程度の上下の幅が異なることにもなり、全体として頻度がばやけてくる。そして、正にこの点が、この後、筆者が疑問に思っている点と密接に関わって来るのである。

いずれにせよ、これらの説明に従えば、主語と動詞が倒置される場合、動詞のあとの人称代名詞は、上は100%から下はある程度幅を持つものの、かなり高い頻度で省略されるということになる。しかし、筆者が実際に古フランス語のテキストに当たってみると、省略される場合があることは分かるが、省略されていない事例も相当数散見される。例えば、各人称・数別の主語人称代名詞（イタリック体）ごとの具体的な出現事例を示してみると次の通りである。

- (1) [V.E.35/9]²⁾; a lui rent *je* graces e merciz, (1人称単数)
- (2) [Q.G.45/22]³⁾ Et einsi fus *tu* deceuz par entendement; (2人称単数)
- (3) [M.A.14/24]⁴⁾ car autrement seroit *il* desloiax, (3人称単数)
- (4) [V.E.12/18] , itant avons *nos* de remenant, (1人称複数)
- (5) [Q.G.187/19] Et ce rescousistes *vos* ; (2人称複数)
- (6) [M.A.76/4] et ce porent *il* bien fere, (3人称複数)

また、テキストにより省略の状況に差があることも感じられたので、この点について調べてみると、Bonnard & Régnier(1989), pp.46-47 に、次のような個別の作品ごとの具体的な記述も見られた。

「G. Moignet (『フランス語人称代名詞』1965, p.93) の調査によれば、『ロランの歌』(2200-2704行)の500行について、人称代名詞主語は、文の第1位の位置が補語によって占められている場合の98%近くで欠けている。ヴィルアルドゥアン〔の『コンスタンティノーブルの征服』〕では、252節から299節において、同様の場合に、人称代名詞主語は全く用いられていない。一方、同時代(1200年頃)の(より民衆的な言語で書

かれた) ロベール・ドゥ・クラリ [の『コンスタンティノーブルの征服』] では全体の35%の場合に、また、1230年に遡る『アーサー王の死』では2分の1の場合に、人称代名詞が現れている。」(拙訳)

この指摘から考えられることは、テキストのジャンル、韻文・散文の別、文体や言語レベル等によっても省略の状況が異なるということである。また、扱う資料の成立時期も関係しているかもしれない。ただ、この指摘で問題なのは、用例の収集状況にばらつきがあり、網羅的でないものもあるため、結果を一律には比べられないということである。筆者には、この問題を明示的で実証的に調べるにはどうしたら良いのかという疑問が涌いた。そして、見る方向を少しずらして、或いは観点を変えて何とかこの現象を扱うことはできないであろうかと考えた。そこで、次節では、疑問点を解明するために、この現象を扱うに当たっての問題点の考え方、方法論について述べておきたい。

2. 問題点の考え方および方法

この問題の根底には、そもそも省略され消えている主語に対して、なぜそれが(a)「動詞の後」にあり、しかも(b)「人称代名詞である時」と言い得るのか、という根本的な疑問がある。そこで先ず、多くの文法書で従来から言われている、省略されるか否かを分ける、この基準そのものに対する筆者の反証の説明をしておく必要がある。

(b)「人称代名詞である時」という条件については(もちろん「動詞の後」という条件下でもあるが)、上述の(1)~(6)の事例を見れば、「人称代名詞である時」でも必ずしも省略されるとは限らないということは明白であろう。

次に、(a)「動詞の後」という条件に関して、それを反証する(すなわち、省略されている主語が動詞の後にあるのか、前にあるのかは分からないということを証明する)ものとしては、語であれ、句であれ、節であれ、文頭に立った全く同一のC⁵⁾に対して、①後続にV⁵⁾S⁵⁾/SV両語順が現れる(すなわち、語順にゆれが見られる)事例や、②SV語順のみが現れる事例を挙げることができる。こういうCの場合、主語が省略されていても、①については、それが動詞の後にあるとは必ずしも言えないし、②については、決して言えないと考えられるからである。例えば、①に関しては次の例を見られたい。

(7) [M.A.16/63] Meintenant se part Lancelos de leanz ...

(8) [M.A.93/27] et maintenant messire Gauvains se part de court et ...

同じ *meintenant* が文頭に立ちながら、主語が、(7)では動詞の後に、(8)では動詞の前に来ている。このようなCが文頭に来る時には、主語が省略されていても、その位置は動詞の後であるとばかりはいえないはずである。また、次のような事例もある。

(9) [M.A.10/1] L'endemain, quant il fut jorz, vindrent a un chastel ou li rois
avoit jeü la nuit, ...

この例において、動詞 *vindrent* の主語 (*il*(3人称複数)= *Lancelos et ses escuiers*)
が省略されているのは、動詞の後であろうか、前であろうか。筆者は、動詞の後であると
は断言できないと考える。なぜなら、同様の環境に置かれた次のような実例があるからで
ある。

(10) [M.A.89/14] A l'endemain, quant li jorz parut, dist messire Gaivains a
Lancelot: ...

(11) [M.A.89/1] Au soir, quant il fu tens de couchier, Lancelos se parti de
leanz a grant compaignie de chevaliers;

これらの事例を見る限り、例(9)と同様の統語環境にありながら、(10)では主語が動詞の後に、
(11)では動詞の前に来ており、主語は動詞の後にも前にも現れる可能性があることを示して
いる。従って、例(9)の主語は、必ずしも動詞の後で省略されているとは言えないのではな
いかということである。従って、(a), (b)2つの条件を満たしても、主語が100%省略され
るというわけではないことは、実例が示す通り確かである。前節で示したように、Ménard
(1988)が、“souvent”という語を挿入したのも、この点に気づいたからではないかと思わ
れる。

さらに、②に関しては、例えば、次のような例がある。

(12) [M.A.41/83] Quant la nuiz fu venue, messire Gauvains s'en vint a l'ostel
le roi de Norgales;

(13) [Q.G.51/12] Et quant il est armez, il se part dou chastel,

例(12), (13)に見られるように、*quant* ~のような状況補語節(従属節)が、単独で文頭に來
る複文の場合、筆者の知る限り、主語が名詞であれ人称代名詞であれ、主節はSV語順し
か取らない。その場合でも主節の主語が省略されることは少なくないが、現れる時には、
名詞であれ代名詞であれ、必ず動詞の前にはか現れない主語が、省略された時だけ動詞の
後にあったなどとどうして言い得るのであろうか。実証的に説明が付かないことである。

この件について、本発表で扱った問題とは少し異なるのであるが、主語の省略の一般的な
問題として、村上(1977), p.58に次のような指摘がなされている。

「S. (=主語) が省略されている場合、 — これは古仏語には非常に多い — それ
がどの位置に省略されているかは永久にわからない問題であり、この種の例文は統計上省
かざるを得ないであろう。」

この指摘は、傾聴に値する至極妥当なものであると筆者は考える。

また、Moignet(1965)は、Cが文頭に立つ(すなわち、CVもCVSも)すべての事例を対象にしているようであるが、上記のように、CVの事例についてはSが本当に「動詞の後」にあると言い得るのか怪しいものが少なからず含まれることになるし、「人称代名詞である時」という条件については、どの事例についてもそれを証明する決定的な決め手は無いように思われる。

以上の理由から、筆者は、Moignet(1965)とは少し切り口を変え、この点が従来のアプローチとは異なる筆者オリジナルな点であるのだが、明示的に「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2条件を両方とも満たしているのに省略されていない人称代名詞主語が、「動詞の後」の名詞主語に対してどのような出現比率を示しているのかという観点からこの問題を扱う。従って、本発表では、文を構成する主要要素であるS/V/Cがすべて明示されている平叙文のうち、Cが文頭に立ち、後続のSとVが倒置されているCVS語順を取る事例のみを対象とすることになる。

3. 資料体について

本稿は、拙論(2005a)、(2007)、(2008)で既に得られた結果をまとめて扱うので、資料体作成に使用した資料は、次の13世紀前半の散文作品3点となる。

Q.G.: *La Queste del saint Graal*, Roman du XIII^e siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1980. (拙論(2005a)参照)

M.A.: *La Mort le roi Artu*, Roman du XIII^e siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève /Paris: Droz/Minard, 1964. (拙論(2007)参照)

V.E.: *La Vie de saint Eustace*, Version en prose français du XIII^e siècle, éd. J. Murray, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1929. (拙論(2008)参照)

作成した資料体は、拙論(2001)、(2002b)、(2002c)の中に掲載されているものを利用した。

4. 資料体の分析結果

上述の資料3点から網羅的に収集した用例を合わせて表にまとめたものが、〔表1〕である。縦軸の区分は、文頭に来る補語Cを、その位階⁶⁾と機能⁶⁾によりタイプ分けしたものである。例えば、C[MOT]_{ob}VSとは、「語の位階に属する直接目的補語」が文頭に来て、後続がV S語順となっている事例のタイプ、C[SYN][PROP]_cVSとは、「句の位階に関係節や同格節が付属している状況補語」が文頭に来て、後続がV Sとなっているタイプということになる。横軸の区分は、文頭のCにより倒置されて「動詞の後」にありながら、省略されていない主語Sを、名詞(句)、人称代名詞、その他(例えば、不定代名詞、指示代

〔表1〕 倒置されながら省略されていない主語の分布 (Q.G.+M.A.+V.E.)

位階・機能による 文頭のCのタイプ	倒置されながら省略されていない主語									合 計		
	名詞 (句)			人称代名詞			その他					
	Q.G.	M.A.	V.E.	Q.G.	M.A.	V.E.	Q.G.	M.A.	V.E.	Q.G.	M.A.	V.E.
C[MOT] _{ob} VS	5	4	1	21	21	1	5	1	0	31	26	2
	10(17%)			43(73%)			6(10%)			59(100%)		
C[MOT][PROP] _{ob} VS	0	0	-	1	1	-	0	0	-	1	1	-
	0(0%)			2(100%)			0(0%)			2(100%)		
C[MOT] _{oi} VS	-	1	-	-	0	-	-	0	-	-	1	-
	1(100%)			0(0%)			0(0%)			1(100%)		
C[MOT] _c VS	280	355	13	120	133	20	46	52	3	446	540	36
	648(63%)			273(27%)			101(10%)			1022(100%)		
C[SYN] _{ob} VS	11	28	1	13	18	5	1	1	0	25	47	6
	40(51%)			36(46%)			2(3%)			78(100%)		
C[SYN][PROP] _{ob} VS	1	0	0	3	1	1	0	0	0	4	1	1
	1(17%)			5(83%)			0(0%)			6(100%)		
C[SYN] _{oi} VS	1	5	0	1	4	2	0	3	0	2	12	2
	6(37%)			7(44%)			3(19%)			16(100%)		
C[SYN] _c VS	131	144	5	150	82	9	26	17	2	307	243	16
	280(49%)			241(43%)			45(8%)			566(100%)		
C[SYN][PROP] _c VS	17	12	1	30	20	0	5	3	0	52	35	1
	30(34%)			50(57%)			8(9%)			88(100%)		
C[PROP] _c VS	18	10	-	41	25	-	1	1	-	60	36	-
	28(29%)			66(69%)			2(2%)			96(100%)		
合 計	464	559	21	380	305	38	84	78	5	928	942	64
	1044(54%)			723(37%)			167(9%)			1934(100%)		

名詞など) に分けたものである。さらに, 〔表1〕 の人称代名詞主語のみについて, 人称と数により下位区分したものが〔表2〕である。

〔表2〕 倒置されながら省略されていない人称代名詞主語の分布 (Q.G.+M.A.+V.E.)

文頭のCのタイプ	je(ge)	tu	il/ele	nos	vos	il/eles	合計
C[MOT] _{ob} VS	19	0	10	4	7	3	43
C[MOT][PROP] _{ob} VS	1	0	1	0	0	0	2
C[MOT] _{or} VS	-	-	-	-	-	-	-
C[MOT] _c VS	117	24	79	18	17	18	273
C[SYN] _{ob} VS	24	0	5	1	6	0	36
C[SYN][PROP] _{ob} VS	1	0	3	1	0	0	5
C[SYN] _{or} VS	2	0	3	0	2	0	7
C[SYN] _c VS	67	20	91	14	27	22	241
C[SYN][PROP] _c VS	13	7	19	4	2	5	50
C[PROP] _c VS	22	4	31	3	4	2	66
合計	266 (14%) [37%]	55 (3%) [8%]	242 (13%) [33%]	45 (2%) [6%]	65 (3%) [9%]	50 (3%) [7%]	723 (37%) [100%]

5. 分析と考察の結果

以下に〔表1〕と〔表2〕に分けて、分析と考察の結果を示す。なお、言語学的な観点から特に重要と思われる新たな知見の箇所には下線を施した。

まず、〔表1〕からは、次の点が指摘できよう。

i) 名詞主語と人称代名詞主語の比率であるが、S、V、Cのいずれも明示されている平叙文のCVS語順の文の用例総数は1934例であった。そのうち、主語が人称代名詞でありながら省略されていない事例は723例で、全体の4割近い37%であった。資料体別では、V.E.: 59% (64例中38例) > Q.G.: 41% (928例中380例) > M.A.: 32% (942例中305例)であったので、この値は全体の平均値的なものとなっていると言えよう。しかし、この値は、決して低いものと言えず、少なくとも「動詞の後」で「人称代名詞である時」は、主語は「大抵の場合、ほとんどの場合」省略されるというような表現は当てはまらないのではないかと言えよう。

ii) これに対して、名詞主語の事例は全体の54%の1044例である。資料体別では、M.A.: 59% (942例中559例) > Q.G.: 50% (928例中464例) > V.E.: 33% (64例中21例)であるから、こちらの値はかなり高い方だと言えよう。主語が省略されない事例は、名詞(句)の方が人称代名詞のものより17%多いということになる。

iii) Cの位階と機能による分布に関しては、タイプ別用例総数が50例未満のものを除くと人称代名詞主語の割合が最も多かったものは、C[MOT]_{ob}VSタイプで、このタイプの全用例59例中43例を占める73%であった。2番目に多かったのがC[PROP]_cVSタイプであり、このタイプの全用例96例中66例を占め、割合は69%であった。

iv) また、名詞(句)の主語の割合が高かったタイプについては、人称代名詞の場合とは異なり、1番目がC[MOT]cVSタイプで、全体の63%(全用例1022例中648例)、2番目がC[SYN]obVSタイプで、全体の51%(全用例78例中40例)であった。

次に、〔表2〕からは、次の点が指摘できる。

v) 省略されない人称代名詞の人称・数別の分布については、用例総数723例中、最も多かったのは、1人称単数の266例で全体の37%を占め、2番目に多かったのが3人称単数の242例で全体の33%である。両者で全体の7割を占めるが、この両者で7割程度という傾向は、これまでの資料体別の3つの各拙論においても同様であった。

vi) 但し、資料体別の拙論の結果では、他の人称・数も含めて数値にばらつきがあり分かり難かったが、今回の資料体全体では、そのばらつきが抑えられ、新たにはっきり見えてきたことがある。1人称単数と3人称単数の分布の割合が近い値(37%と33%)で、それ以外の人称・数(こちらはどれも6~9%の間)よりも突出して高いという点である。その理由としては、動詞数が最も多い第1活用動詞に見られるように、動詞語形のみによる1人称単数と3人称単数の区別が、文法書などで一般的に言われているよりかなり早い13世紀前半の時期には既に困難となり、主語人称代名詞の存在が不可欠となり始めていたからではないかと考えられる。

注

* 本稿は、日本ロマンス語学会第55回大会(2017年5月21日、神田外語大学)における口頭発表をもとに、加筆・修正を施したものである。

1) 実際、この頻度表現は、研究者により様々である。この後本文で挙げるもの以外に、Buridant(2000), p.746:「大抵の場合(le plus souvent)」, Foulet(1980), p.313(§457):「非常にしばしば(très souvent), 容易に(facilement)」, Hasenohr & Raynaud de Lage(1993), p.234:「頻繁に(fréquemment)」, Joly(1998), p.290:「ほとんどの場合(dans la plupart des cas)」, Moignet(1979), p.357:「非常に頻繁に(très fréquemment)」などが見られる。

2) *La Vie de saint Eustace*, 35節/11行からの引用例(以下同様)。

3) *La Queste del saint Graal*, 45ページ/22行からの引用例(以下同様)。

4) *La Mort le roi Artu*, 14節/24行からの引用例(以下同様)。

5) S/V/Cは、それぞれ主語(sujet)、動詞(verbe)、補語(complément)を示し、古フランス語における文の主要構成要素である。基本語順はSVCであるが、平叙文でCが文頭に立つとCVSという語順が取られ、この2つの語順が最も頻繁な語順である。

何れも文の第2位に動詞があることから、この「動詞第2位」文が古フランス語の語順の特徴とされる。

6) 位階(rank)とは、M. A. K. Halliday の用語で、言語単位の大きさを言う。大きい方から、節[PROP] > 句[SYN] > 語[MOT] の順になる。機能とは、補語Cの3つの機能：直接目的補語(C_{OD})、間接目的補語(C_{OI})、状況補語(C_c)を指す。

参考文献

- 今田良信(1993)：「古フランス語における文頭の補語要素と語順 — CVS語順対CSV語順を基準として —」, 『ニダバ』, 22, pp.80-92.
- 今田良信(1995)：「古フランス語における文頭に従属節を有する複文の語順について」, 『吉川守先生御退官記念言語学論文集』, 溪水社, pp.31-45.
- 今田良信(1995)：「古フランス語における文頭の補語と語順」, 『ロマンス語研究』, 29, pp.68-82.
- 今田良信(1998)：「古フランス語における文の肯定／否定と語順 — 文頭に現れる若干の状況補語(句)とCVS／CSV語順との関係について —」, 『新村猛先生追悼論文集』, フランス図書, pp.205-210.
- 今田良信(2001)：「古フランス語における語順解明のために — 13世紀散文作品 *La Mort le roi Artu* による資料体作成 —」, 『広島大学大学院文学研究科論集』, 第61巻, 特輯号4, 72p.
- 今田良信(2002a)：「古フランス語における文の肯定／否定とCVS／CSV語順 — 文頭に立つ文の肯定／否定に関わる若干の状況補語(句)と統語環境 —」, 『古浦敏先生御退官記念言語学論集』, 溪水社, pp.75-89.
- 今田良信(2002b)：「古フランス語における語順変化の研究のために — 13世紀散文作品 *La Vie de saint Eustace* による資料体作成 —」, 『ニダバ』, 31, pp.1-10.
- 今田良信(2002c)：『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 —』, 溪水社, 409p.
- 今田良信(2005a)：「古フランス語におけるCVS語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について — 13世紀散文作品 *La Queste del saint Graal* を資料体として —」, 『広島大学フランス文学研究』, 24 (原野昇教授ご退職記念特集号), pp.372-383.
- 今田良信(2007)：「古フランス語におけるCVS語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について — 13世紀散文作品 *La Mort le roi Artu* を資料体として —」, 『ロマンス語研究』, 40, pp.88-97.

- 今田良信(2008):「古フランス語におけるCVS語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について(Ⅲ) — 13世紀散文作品 *La Vie de saint Eustace*を資料体として — 」, 『ニダバ』, 37, pp.39-47.
- 村上勝也(1977):「主格関係代名詞節における古仏語の語順 — S. C. V. 構文の種々相 — 」, 『広島文教女子大学研究紀要』, 12, pp.49-58.
- Bonnard, H. & Régnier, C. (1989): *Petite grammaire de l'ancien français*, Paris: Magnard.
- Buridant, C. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Foulet, L. (1935): L'extension de la forme oblique du pronom personnel en français. *Romania*, 61, pp.257-315, pp.401-463; 62, pp.27-91.
- Foulet, L. (1980³): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris: Champion.
- Franzén, T. (1939): *Etude sur la syntaxe des pronoms personnels sujets en ancien français*, Upsala.
- Imada, Y. (1997): La distinction *affirmation/négation* dans la phrase et l'ordre des mots en ancien français — Sur le rapport entre certains compléments circonstanciels en tête de phrase et l'ordre CVS/CSV — , *Studia Romanica*, 30, pp.9-16.
- Hasenohr, G. & Raynaud de Lage, G. (1993²): *Introduction à l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Joly, G. (1998): *Précis d'ancien français*, Paris: Armand Colin.
- Ménard, Ph. (1976): *Manuel du français du moyen âge: 1. Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: SOBODI.
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
- Moignet, G. (1965): *Le pronom personnel français: Essai de psycho-systématique historique*, Paris: Klincksieck.
- Moignet, G. (1979²): *Grammaire de l'ancien français*, Paris: Klincksieck.
- Raynaud de Lage, G. (1975⁹): *Introduction à l'ancien français*, Paris: SEDES. [大高順雄訳(1981):『古フランス語入門』, 朝日出版社]
- Vidos, B. E. (1959): *Manuale di linguistica romanza*, Firenze: Leo S. Olschki.
- Wartburg, W. von (1971¹⁰): *Evolution et structure de la langue française*, Berne: Francke. [田島宏・高塚洋太郎・小方厚彦・矢島猷三共訳(1976):『フランス語の進化と構造』, 白水社]